

2015年11月8日

永眠者記念礼拝 説教題「受け継ぐべき遺産」

ローマの信徒への手紙8章22節～25節

麻生教会牧師 久保哲哉

1. 教会での葬儀について

「教会で葬儀をするとき、敗北して立ち去る死の姿が見える」

これは昨年天に召されたある牧師夫人の言葉です。

古来、日本人にとって「死」とはいとうべきものであり、死は穢れそのものであったといえます。今でも教会以外で葬儀が行われれば帰りに清めの塩が配られます。死の穢れから身を清めるためです。また墓についていえば、かつて人々は死者のたたりを恐れるがゆえに大きな墓石を置いて死者の怨念をこの世への未練を閉じ込めたというのが日本式の墓の始まりだそうです。

また、一般庶民の葬儀に関していえば、武士などの特権階級を除いて、江戸時代以前には僧侶が葬儀を行うということはなかったのだそうです。「死」は「穢れ」そのものでしたから、僧侶もこれに触れることを避けたのでしょう。その発想はよくわかります。よきサマリア人のたとえ話で聖職者である祭司やレビ人が半死人を助けなかったのは同じ理由によるのです。

それはともかくとしてなぜ日本で一般人の葬儀を行うようになったかといえば、キリスト教徒を弾圧するためであったといえます。一説によれば檀家制度を創設することで、すべての国民を寺の檀家として仏式葬儀を行うことを義務づけることで、キリスト教徒をなくすというのが目的であったとも言われます。

そうした中で今から400年以上前、フランシスコ・ザビエルが日本にキリスト教を伝えてまもなく、キリシタンとなった者の葬儀が行われた際には見物人が3000人集まったという逸話があるということを知りました。人々を驚かせ、足を運ばせたのはその葬儀で「歌」を歌ったことであったと知りました。死を「穢れ」「忌むべきこと」と考えていた当時の人々にとって、賛美をしながら人を弔うなどということは不思議に見えたことでしょう。今も初

めてキリスト教の葬儀に触れた人々は同じ思いを抱く人が少なくないのだろうと思います。

今から2週間前。先々週の日曜日。私どもも「墓」の前で賛美をする経験をいたしました。麻生から車で1時間ほどの簾舞の地にわたしたち麻生教会が長年望んでいた教会のお墓が建ったためです。その時の写真を掲示板に載せておきましたので、お帰りの際にどうぞご覧下さい。かわいい良い墓ができました。60人分が納骨でき、それとは別に分骨のスペースが40あります。また、その他にも90名ほど入ることができる合葬用のスペースを設けましたので、合計で200名近く入ることができる墓となりました。当日は主なる神に墓を献げる献墓式と、この墓ができることを待ち望みつつ天に召された教会員の納骨式が行われました。墓石には「神は愛なり」との御言葉が聖書のもともとの言葉である古代ギリシャ語で刻まれています。

人生の終わり、たとえ骨になったとしても主が共におられる。そして愛の神に捕らえられ、守られていることを確認するためにこの聖句を掘りました。かつては旧会堂の玄関先に、現在は牧師間の屋根に掲げられています。この麻生教会の会堂に創立以来、53年間、実際に掲げてきた聖句です。

それで納骨の度に思い起こす歌があるのですが、みなさんは「千の風になって」という歌をご存じでしょうか。最近、音楽CDの売り上げが落ち込む中、男性のアーティストとしては最後のミリオンセラーの曲なのだそうです。歌詞がとても印象的な歌で、墓の前にくるといつも思い出す歌ですので少し紹介しましょう。次のような歌です。

「わたしのお墓の前で泣かないでください

そこに私はいません 死んでなんかいません

千の風に、千の風になって あの大きな空を 吹きわたっています」

一時期話題となった歌ですので多くの方がご存じかと思います。なんとも哀愁をさそう歌で、また、メロディもよいのです。一昨日、幼稚園の研修会で日本キリスト教会の桑園教会に行きました。目的はこの麻生教会と同様に

幼稚園が併設されているために、そこでの保育を拝見して、実際の保育に生かすためですが、ちょっと抜け出して教会の礼拝堂を見せて頂きました。そこで奉仕をしている方々に頼んで週報をもらってきたのですが、今日、同じ時間に持たれている桑園教会の説教題は「お墓の前で泣かないで」というものでした。きっと同じような説教がなされているのでしょう。ただすごいなと思ったのは桑園教会では本日、「全家族礼拝」として教会学校の子供たちと共に守る礼拝で、礼拝後に子どもの祝福式を行う予定であるとのことでした。私たちも先月、そうした礼拝を持ちましたが、そういう子どもと一緒に祝福に与る礼拝で「お墓の前で泣かないで」という説教題というのがとてもいいなと思いました。

かつてこの「千の風になって」の詩は「上を向いて歩こう」で有名な坂本九の葬儀で朗読されたそうです。またアメリカの 9. 11 の同時多発テロがありましたが、その1年後に、犠牲になった方々の追悼式が行われたときにも父親を天へ送った11歳の少女によって朗読されたことでも話題になったことを思い起こします。

坂本九にしても、突然父親を取り去られた少女にしても、主なる神に「なぜ」と問わざるを得ない。そのような時に読まれた詩であることを知っていましたから、愛する者の死に直面し、「なぜこんなことが」という問いと悲しみの極地にある方々を前にいつも思い起こす歌となっています。けれども、そのたびに、いつも思うことがあるのです。

歌詞にある通り「わたしのお墓の前で泣かないでください」とはその通りです。愛する者の死は言いつくせない大きな喪失感と悲しみをもたらすものですけれども、残されたものがいつまでも自分の死によって悲しんでいることを、すでに召された者も、神も望むはずがないのです。そのことを現した良い歌詞だと思います。しかしながら、その後の歌詞「眠ってなんかいません、死んでなんかいません」というのは明らかに違うのです。そのことをいつも思わされるのです。

確かに、一時、悲しみのゆえに愛する者の「死」の出来事から目をそらしてしまう、ということはあることでしょう。いや、そらすというか、葬儀の

際にその現実を受け止めることができずに、まるで映画のワンシーンを見ているように、この「愛する者の死」が現実ではないように感じてしまう。「心ここに有らず」という状況で葬儀の日を迎える方々を多く見てきました。これはやむを得ないことだろうと思っています。

ですから一時、「死んでなんかいません」という歌に慰めを得るということは時にあることなのだろうと思うのですけれども、ここだけは、この歌詞だけは「偽り」とは言わざるを得ません。「死」への恐怖と悲しみから「死」そのものをごまかして、逃避しているにすぎないと言わざるを得ないということをいつも感じています。しかしながら、信仰の事柄はそうではないのです。わたしたちは愛する者の死から目をそらすのではなく、これを受け止めて、先に進んでいくことが必要なのです。

冒頭で紹介したある牧師夫人の言葉「教会で葬儀をするとき、敗北して立ち去る死の姿が見える」との言葉は真実です。主キリストの十字架の恵みのみ「その信仰のみ」が「死を受け止めて、先に進んでいくこと」を可能とする。そのことをつくづく思わされています。

2. 信仰者にとっての第1の望みについて

信仰者にとっての第一の望みは愛する家族と礼拝を共にすること。そして、できることなら同じ信仰を持つこととあってよいでしょう。

愛する家族自らが生かされた信仰を知り、これを受け継いでくれるということが信仰者の大きな願いです。ただし、伝えたいと思ってもこれが中々難しいのです。特に家族に伝えるのは本当に難しい。だからこそ、たとえ道半ばにして天に召されたとしても、教会がその意志を継ぎ、キリスト教の信仰についてご紹介する機会を設けることができればと思って本日の永眠者記念礼拝が毎年行われています。また、牧師としては、そして教会としては同じことを思って教会の墓を建てました。墓では毎年墓前礼拝を持つ予定です。納骨の費用は全部で4万円ほど。毎年の管理料は教会が持ちます。すでに目標の献金額が集まりましたので、皆さんから余計に費用をいただくことはありません。教会があり続けるかぎり、墓は守られます。

これからのこととしてはたとえ死しても、毎年、必ず共に礼拝の時をもつ予定です。今は少子高齢化で墓を継ぐものがいなくなる家も少なくありません。もし、教会での葬儀に希望を持たれた方。そしてご自分の墓を継ぐものがいなくなったとしたならば、是非、教会墓地への納骨をお考えいただければと思います。教会員とその家族であれば教会が責任をもってお引き受けいたします。

さらにいえば、教会においては葬儀だけがよいのではないのです。葬儀では死のただ中にあっても「神に愛されている」という祝福が語られます。しかしながら、その祝福は私たちが生まれる前から与えられているものです。礼拝の最後には必ず祝福をもって閉じられますがこれは礼拝の度ごとにその祝福を確認するために2000年間行われてきたことです。

それで、本日受付をしていただいた場所の正面にある麻生教会の掲示板には先月行われた献墓式・納骨式の様子と子ども祝福の写真を二枚並べて貼っておきました。生まれる前から成人式や結婚式、墓に葬られた後まで毎週祝福されて一週間を始めるのが教会という場であることを確認するために掲示しました。

確かに先日納骨を終えたWさんは昨年のパンテコステ礼拝の朝に天に召されました。それから数えると、翌年の1月にFさん。4月にはIさん。5月にTさん。6月にはSさんが天に召されました。そのことで大きな悲しみが教会を覆いました。人間の「死」の問題は山あり谷ありの人生の中でも最も乗り越えがたい問題です。

けれども、今日開かれた聖書の箇所もその苦難と悲しみから目を背けることはしません。その悲しみから目を背けることなく、しかし、神から与えられた祝福からも目を背けない。これが教会が受け継いできた信仰なのです。

3. 「私たちが受け継ぐべき遺産」について

この「私たちが受け継ぐべき遺産」である信仰について知るために、ローマの信徒への手紙8章22節と23節を再びお読みしましょう。22節以下には次のように記されています。

「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます」

「被造物」とは神が造られた人間以外のすべてを指します。神が創造し、人間に与えた「自然」と言ってもよいでしょう。森林伐採や自然破壊などで自然が悲鳴をあげている。人間の都合で命を失いつつあり、呻いていることを聖書は正直に語ります。またそれだけではない。わたしたち人間も「神の子とされること」、「この身体が贖われること」を「うめき」ながら待っているといいます。きっと、人間が本当に神の子とされ、自然と共存していくときに、自然の「うめき」は解消されることを示しているのでしょう。

私たちが完全に神の子とされるのは将来のことです。信じる者もいまだ完全に神の子とはされていません。それは原発の問題やこの世から憎み争いが耐えないことから容易に計り知ることができるでしょう。

しかしながら、恵みをもって歴史を始められた主なる神が責任をもってその歴史を閉じられる時が必ずくるのです。神がその歴史を閉じようとするとき、その時がきて私たちが本当に「神の子」とされることで、「この身体が贖われる」ことで「死」は克服される。信じる者はそのときに神の子としての完成を見ることとなるのです。

その来るべき時には思い煩いも、問いも、悲しみも何もかも、全てが神によって埋められて、今は「うめく」私たちも主イエス・キリストのように「神の子」としての完成を見ることで新しい命に復活することができるのです。

先ほどの歌の歌詞のように、お骨を海に散骨すれば、大海原の一部となることもあることでしょう。また、お骨を空にまけば千の風になって地球上を吹き回すこともあることでしょう。しかしそこでおしまいで良いはずがない。うやむやになって消えてしまっ、それで、悲しみですべてが終るはずがないのです。

すでに天に召された者も、ただ眠っているのではないのです。信仰を与え

られた者は復活の朝が「必ず」来ることを信じて眠りにつきました。この眠りは必ず終わりの時がくるのです。そのことを信じて、望んで、その時を待つのがキリスト者の姿勢となります。

「望んでいる」ということはまだ「ない」ということです。だから、信じて聖霊の力を与えられている者も、この地上にいる間は「うめく」のです。愛する者との今生の別れを経験した者は、もう、この地上では再び「会う」ことは決してできないのです。だからこそ、地上ではこの「うめき」は続きます。「無い」のに「有る」とするのですから「うめながら」歩むのです。

その未だ「ない」事柄が必ず起こる。それを「望み」として掴むことが「信仰」と言ってよいでしょう。その「うめき」は「希望」を伴う「うめき」です。解決が「ない」のであれば「絶望」するしかないのですが、そうではないのです。

必ず解決が「ある」と信じて「待ち望む」「うめき」です。そこには筆舌しがたい違いがあります。信仰がなくとも、そのうめきに耐えることができるのであれば、信仰はいらないのです。主キリストはそうした強い者のためにこの世に来られたのではないのです。

「お墓の前で泣かないでください」と言われても涙を流さざるをえない、弱さを持つわたしたちです。そんな弱さを持つ私たちのに希望を与えるために主キリストは世に来られたのです。私たちのうめきを本当に理解し、これを担い、救い出すために神が十字架で死なれたのです。

さらにはその初穂として、わたしたちもその後続くことを示されるために復活されたのです。

「わたしたちはこのような希望によって救われているのです(ロマ8:24)」

これこそ、信仰をもってその生涯を閉じた信仰の先達たちが私たちに伝えたかった信仰です。弱さを覚えてこの地上をうめき、生きるわたしたちが真に「受け継ぐべき遺産」。「信仰」です。

礼拝堂正面に掲げられている写真をご覧ください。ここにはすでに天に召された方々の在りし日の写真が掲げられています。「うめき」ながらも、主なる神から与えられた信仰をもってその生涯を走り抜いた方々です。この方々の内に輝く力強い「何か」を皆さんも感じたことがあるでしょう。その「何か」こそ神が与え給うた「信仰」なのです。

教会が2000年間受け継いできた真の遺産である「信仰」を受け継いでいきましょう。わたしたちも主キリストの十字架と復活の福音に生かされて歩みましょう。ここに本当の命に至る道があるのです。祈りましょう。

天の父なる神よ。あなたの御名をたたえます。

あなたによって信仰を与えられ、新しい命に生かされる福音について再び聞くことができました。この大いなる恵みに感謝をいたします。

未だ、終わりの日までの道のりを歩む私たちには思い煩いがつきません。悲しみもつきません。悔い改めつつ、しかし呻きつつ歩む私たちですから、御言葉と聖霊による励ましと慰めをお与えください。

あなたによって信仰を支えられ、信仰の先達たちがそうであったように、悲しむ者には慰めが、疲れた者にはあなたの癒やしを与えられ、あなたから与えられた道をあなたの御守りと祝福の内に走り抜くことができますように。導いてください。全てをあなたにお委ねいたします。愛する主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。



2015年 こども祝福の様子



麻生教会墓地